

北支からノモンハン戦闘に

福岡県 野尻清人

私は大正七（一九一八）年六月一日、瀬高町で父・野尻清、母・シヅノの長男として生まれました。弟には次男・光成、三男・薫、四男・弘樹、妹として長女・百合子、次女・きぬ子、三女・春子で家族は九人でした。家は農業をしていました。私は昭和八（一九三三）年、瀬高町立太神尋常小学校の浜田尋常高等小学校高等科を卒業して家の農業を手伝っていました。その後近くの土建業の柿原組へ入社することになり、家業の農業を手伝いながら土建業で働くことになりました。私

は至極元気で体調も良く毎日楽しく働くことが出来、家族がとても喜んでくれていました。

昭和十三年に徴兵検査を受け甲種合格になりました。大変名誉なことでした。翌年一月に小倉野戦重砲第五連隊の補充隊に入隊しました。本隊は北支に駐留と云うことですが、入隊してからの約三カ月間、小倉での初年兵教育は大変でした。入隊から初年兵教育の苦労の話は聞いていましたが、こんなにつらいものかと思ひ、心の内では泣いても外には出さず、ただ人作りと大和魂と軍人精神の心の入れどころであると思ひ頑張りました。今の世には通用しない経験と辛抱をした訳です。

初年兵の時は皆同じで一期の検閲が済むまでは、どんなことがあっても頑張らなくてはならないと

思い、元気を出して頑張りました。

私が教育を受けたのは十五榴弾砲(曲射砲)で輓馬六頭曳きの大変に大きくて重いものでした。私はその観測兵(観測班)として教育を受け、度目盛の観測教育では少しの誤差も許されません。観測距離には発射されたものは、正確であれば弾は確実に当たるものであるから緊張の連続でありました。

そして一期の検閲も終わりいよいよ本隊を追及することになり、昭和十四年四月末に門司港より乗船、本隊の駐屯する北支に向かつて出発しました。着いた所は北支のターク港で、上陸して初めて見る支那大陸を何日もかかって歩きました。本隊に着くまでいろいろありましたが、記憶にはよくありません、本隊は関部隊の第五連隊であったと思います。

しばらくして昭和十四年七月頃に満州のノモンハンの戦鬪が起こり、我が部隊も参加するべく北支よりソ満国境の満州里に向い、連隊の十五榴十

八門を汽車に乗せて輸送準備を行い、行動を開始しました。

途中新京(長春)で兵隊だけが下車して小休止しました。その時ちようど街ではお祭りのような催しがあり、見物することが出来ました。さらにそこから出発してソゴンにて下車、ここに駐屯することになりました。しかしノモンハンの戦鬪は停戦になり、行かずに済みました。

新京からの途中ではいろいろのことがありましたが、昭和十四年十月頃より十一月には雪中行軍で天幕の生活をした際に、満州の寒さのため雪中で倒れる者も出ました。

これが終わって部隊は凱旋帰国することになり、大連に集結して、ここで約一カ月の検疫のための駐留することになりました。

そして内地へ帰り、小倉の原隊に帰着出来ました。しかし十二月に戦地での無理もあり、加えて内地へ帰った気のゆるみもあって、胸部疾患のため小倉陸軍病院に入院することになりました。

十二月末日より陸軍病院で療養していましたが、翌年四月に現役免除になり、家に帰り、自宅療養していました。しかしこれも思わしくなく、隣町の高田町今福の安武病院に入院することにしました。すると、その病院には戦地の野戦病院にいました藤吉軍医殿がいて、親切に見て頂いたので、約一年間の療養生活で良くなり、本当に藤吉軍医殿は命の恩人で、感謝しています。

八十七歳の今日の命はなかったと、ただ感謝の気持ちでいっぱいです。そして昭和十六年頃より元気になり、入隊前に入社していた土建業柿原組に再び入社することが出来ました。その年の十二月には大東亜戦争が勃発して、ハワイ沖攻撃やら南方戦線やら騒がしくなり、一億火の玉のように沸き立ち、第二次世界大戦が始まりました。

そこで私にも再度召集令状が来たのが昭和十九年五月でした。小倉野戦重砲第五連隊補充隊に入隊せよとのことで、入隊しますと大きく変わっていました。約三カ月間の教育のし直しです。今度

は部隊が機械化して輓馬から牽引車に変り、観測教育も観測器の目盛も尺からミリに変わりましたので教育を受け直すことになりました。

昭和十九年七月、名古屋師団に動員され、八月に動員完結して南方戦線に向かうものと思っていました。乗船が出来ず、南方ではなくて内地勤務となり三重県桑名辺りに移駐しました。

その後滋賀県の湖西今津演習場の兵舎に入りましたが、愛知県渥美半島の下細谷海岸に敵が上陸すると云うことで陣地及び観測所の構築に従事しました。渥美半島ではこうして一カ月ほどいましたが、名古屋の師団に転属してからは今津演習場とか点々と変り、内地防衛とはいえ毎日が土木工事のようなことをしていました。

今考えて見ますと、国内の戦鬪は短くて済んだのですが、長い間毎日が戦場であつたら、本当に心の安まることなく毎日不安の日々を送ることになるのです。

このような戦争は二度と起こしてはなりません。

北京憲兵分隊勤務の思い出

福島県 菊地 一郎

そして昭和二十年八月十五日終戦になり、天皇陛下の玉音を聞き涙が止まらなかったものです。思い起こせば、昭和初期、軍隊にあこがれ、名誉な軍人になってお国のために一命を捧げて一生懸命働くことが、その当時の日本男子の本懐と考えていたので、悔しくてたまらなかったのです。

そして第一回目にはノモンハン戦に参加、途中停戦となって内地へ帰り、現役除隊することができました。そして第二回目の召集では内地勤務とはいえども終戦までの約一年三カ月間、一生懸命お国のために働きました。その甲斐なく終戦になり、兵器返納等の整理が終わったのが十月で、十一月に部隊も解散して我が家に帰りました。その後、出征前に勤務していた柿原組に復職して、五十歳頃まで働くことが出来ましたのも藤吉軍医殿の親身のお陰と感謝している今日この頃です。

最近の我が家は、私は八十七歳、妻ノブ子が八十歳、それに長女・峰子、長男・進、次男・豊、三男・昭良、四男・信幸の子供五人、孫・七人です。

私は第四人妹一人の五人兄弟の長男として生れました。家業は兼業農家で、当時は田畑四町八反を耕作し、水稻と養蚕業を営み、常時二人の雇人がいました。家族は父母と叔父さん二人、私達兄弟五人と、祖母は亡くなっていましたが祖父の十人大家族でした。

岩月小学校を卒業すると県立農事試験場会津支場にて農業を勉強し、その後、青年学校で戦時下の軍事訓練を教育され、昭和十七（一九四二）年六月の徴兵検査で甲種合格、晴れの入隊を一日千秋の想いで待っていました。

そんな時、弟は海軍志願で横須賀海兵団に入隊が決まり、また叔父は大正十五（一九二六）年生れで海軍を志願し、当時は海軍大尉で横須賀海兵団に勤めておりました。